

古くから浜松で盛んに行われてきた凧揚げ合戦。それが市民をあげてのお祭りとして「浜松まつり」の名称に変わったのが

昭和25年(1950年)のこと。その年、浜松市など4団体が構成される浜松まつり本部が組織され、現在に至っています。



わが心の浜松

昭和25年

当時はおよそ60の町が参加

「浜松まつり」の初開催

「大正年間から、凧揚げは和地山練兵場(現和地山公園)で行われていましたが、戦争で一時中断。戦後は昭和22年(1947年)に復活し、翌年、初めて中田島での凧揚げが行われました。しかし、当時の中田島は整地が十分でなく、凧を揚げる時に足を取られるため、それ以降は再び和地山で実施。昭和42年(1967年)に中田島凧揚げ会場が整備されるまでは、和地山での開催だったのです」。このように解説してくれるのは、浜松まつり会館の幸田春雪館長です。

「スタートして間もないころの『浜松まつり』は、市の中心部からおよそ60の町が参加。わたしは、戦前からまつりに参加している和地山町の出身ですが、昭和30年代ぐらいまで、和地山はまつりに参加する中で最も北側の町でした。当時のまつりは5日間の開催で、

終了時間は午後10時と決まっておらず、朝までわいわいやっています。わたしはそのころ高校生ぐらいでしたが、学校で『まつりに参加してはいけません』といわれ、『つまらんなあ』と思ったことを覚えています」

やがて「浜松まつり」に参加する町は郊外にまで広がり、規模はさらに拡大。バブル全盛期の昭和61年(1986年)には、一気に14町増えて合計107町と、初めて3ヶタの大会を超えました。

また、その前年の昭和60年には浜松まつり会館が完成し、まつりは県外からも人を呼ぶ観光資源として注目を集めるようになっていきます。

「平成21年(2009年)には新たに2町が加わり、参加町数は174と戦前の3倍以上に膨らみました。一方、観光客の動員数は昨年で148万人と、ゴールデンウィーク中の観光行事としては全国4位を確保しています。ただ、まつりはやっぱり見るより参加す



和地山公園で行われていた凧揚げ合戦の様子

る方が楽しいもの。わたしもラッパの音を聞くと『そろそろまつりだな』と気分がわくわくします」と幸田館長は話しています。